

失敗から生まれる  
「なにか」があるから  
研究は面白い

## Role Model 08

## 笹尾亜子

大学院生命科学部助教

大学教員  
→ 大学院（修士課程）  
→ 薬学部

**Profile** ささお・あこ 1990年に鹿児島県の高等学校を卒業後、熊本大学薬学部に入學。1994年に同大学卒業後、基礎研究の楽しさから修士過程に進学。その後、1996年に熊本大学医学部法医学分野に就職し、2007年学位取得。県内の法医学解剖を一手に引き受ける分野内で薬毒物分析を担当する。業務に活かせるよう、簡便な薬毒物の免疫学的検出法の開発を研究テーマとしている。私生活では2児の母。

### 学生時代は落ちこぼれでも、研究は楽しくて楽しくて

学生時代の自分を振り返ると、ロールモデルとして話せるような事はほとんどありません(笑)。授業を聞いても、その内容が何に繋がるのか、どう大切なのかもわからず、試験も惨憺たるものでした。今でも鮮明に覚えていることがあります。入学したばかりの頃「予習をしたらわかるかもしれない!」と教科書を読み込んで行ったものの、教科書とかけ離れた授業内容に「こりゃダメだ」と落ち込んだことがありました。この仕事に就いた今となっては、諦めずにもっと大切に講義を聴いていれば良かったと思っています。

そんな落ちこぼれの学生でしたが、研究室に所属してからは毎日の実験が楽しくて楽しくて仕方ありませんでした。「自分が世界で初めて見るデータかもしれない!」という興奮と、自分で調べて工夫した実験がうまく行く時の喜びは、それまでに経験した事がないものでした。そんな私でも、昼も夜もないような生活をしている研究者になる事にはかなりの抵抗がありました。けれど、心から敬愛していた恩師から「君は興味のある研究については一生懸命勉強するから、研究者として進んでみなさい。」

と言われた事が後押しとなり、現職に就きました。

### 予想通りになったりならなかったりそれが研究職の醍醐味

法医学分野の中では、実務活動として主に薬毒物の検査を担当しています。最近では法医学に関するドラマのおかげもあって、どんな講座なのか知っている方も多いように思います。熊本県では唯一の機関になるため、年間約150件ある県内の解剖事案を一手に引き受けています。担当している薬毒物検査は、亡くなられた方の死因に薬毒物の影響がなかったかを確認する大切な検査です。大学には高額な分析機器がありますので、多くの薬毒物を一斉に検査する事ができますが、解剖にまで至らない事案が大半です。そんな場面でもインフルエンザの検査キットのように簡単に薬毒物を検査できる方法を作り上げたいという気持ちから『薬毒物の免疫学的検出法の開発』という事を研究テーマにしています。

「研究の魅力は?」と聞かれたら、自分で考えて調べて工夫して「よし!」と思って実験してみた事が、予想した結果になったりならなかったりする事だと思います。予想通りにならない事も多いのですが、その結果が「何かを



伝えているのではないかと考えるのも楽しい作業です。また、自分が行った研究を論文という形で残す事ができるのも素敵だと感じます。もしかしたら、後世の誰かが自分の論文を参考にして「何か」を思いついたり、次の研究に繋いでくれたりするかもしれない、というのは魅力的ではないでしょうか。

### 失敗することでメンタルが強くなる恐れずに挑戦することが大事

家庭では、夫の全面的な協力をもらいながら2人の息子を育てています。子どもを育てながら見る世の中は、大人だけの視点とは全く異なるもので本当に面白い。子どもを通して近所付き合いが始まるなど、「仕事と家

庭」とは別の「第三の場所」を持つ事は、自分の精神面にとっても良い影響を与えていると感じています。ひとそれぞれにワークライフバランスの取り方があるとは思いますが、良い仕事をするためにも自分の生活を充実させる事は大切だと思います。

また、最近の学生たちと話をしていると、「無駄な事をしないように」「失敗しないように」という事に細心の注意を払い過ぎているように感じます。「賢いな」と思う反面、若い時代につまずかなかつたばかりに、将来「失敗」への対処の時にくじけるのではないかと心配でもあります。大学時代には大いに心を養って、「しなやかで逞しい心」を持って社会に出て欲しいと願っています。

10年後の目標は?

10年前を振り返った時に「その頃より成長した!」と自分で思えることを目標に常に食欲に学習欲を持って毎日を過ごしたいです。

座右の名「身に起こる全ての出来事は必然である」



西谷研究室の皆さんと(前列右は西谷陽子教授)